



リカで、現地を襲う大干ばつを目的にしたりした。訪れたのはザンビアの東に位置するモザンビーク。70年代後半から続いた内戦終結を受け、近隣諸国に散らばっていた難民160万人が帰還し、医療支援のため国際医療援助団体「AMDA」(岡山市)の専属医師として活動に加わった。

難民の生活再建には農業が頼みの綱だったが、干ばつがその道を険しくした。「インド洋に注ぐリンボポ川の支流を水が流れなくな

「先進国の文明は失敗した」ということを、私たちは認識する必要があります」

アフリカ南部ザンビアで心臓外科医の指導、育成に取り組み吉野川市のNPO法人「TICO」の代表理事で医師の吉田修さん(63)

「同市山川町前川」は、その心境を語る。山川で開業する「さくら診療所」で、再生可能エネルギーを積極導入している思いを尋ねたときの答えだ。1995年、吉田さんは3度目の訪問となったアフリカで、現地を襲う大干ばつを目的にしたりした。訪れたのはザンビアの東に位置するモザンビーク。70年代後半から続いた内戦終結を受け、近隣諸国に散らばっていた難民160万人が帰還し、医療支援のため国際医療援助団体「AMDA」(岡山市)の専属医師として活動に加わった。難民の生活再建には農業が頼みの綱だったが、干ばつがその道を険しくした。「インド洋に注ぐリンボポ川の支流を水が流れなくな



り、住民たちは流れの止まった汚い水を飲むしかなかった。食物もかちかちの黒い野生の芋が少しかつた。住民たちは栄養失調や免疫低下による感染症罹患に苦しめ、医療だけ少々改善しても命を助けられないと痛感する日々だったと語る。2002年、南部アフリカはまた大干ばつに見舞われ、1200万人の人が飢えに苦しんだ。8月、吉田さんはザンビアを訪ね、農家約20軒を回ったが、トウモロコシの蓄えが全くなくなった。子どもたちは食べられる野草を摘んだり、小



食べられる野草摘みに時間を割かれる子どもたち=2002年、ザンビア(吉田さん提供)

### 吉田修さん(上)

# アフリカの干ばつ 原点

鳥を追い回したりと、学校ど、20世紀の人類の負の歩みを検証していた。「特集を見て、はっとした。環境面では酸性雨や砂漠化、森林破壊が取り上げられ、人類の経済活動が背景として指摘されていた。この間、人類は何をしてきたのか。アフリカの干ばつはまさにその延長線上で、人類と地球環境がせめぎ合う最前線だと思った」

「災害」がはつきりパネルやソーラー温水器がとほ結びついていなかった。あり、暖房や給湯には木質バイオマスボイラー、まきストーブが活躍する。太陽光の自家発電で足りない分は、再生エネ比率の高い新電力会社から購入。補助の灯油ボイラーがたまに動くこともあるが、ほぼ100%、再生エネで賄っている。「化石燃料に頼る先進国の大量消費社会が温暖化を引き起こし、アフリカの子どもを奪っている。国際協力活動を始めた頃は、日本の高い技術力で生活向上に貢献しようなどと思っていたが、現実は今全くそうじゃなく、過酷な現実が私たちを招いていた」。この

「21世紀は警告する」だ。核兵器開発や飽食の時代な「1999年に開院。病棟が建った2002年に初めて太陽光パネルを設置した。外来棟、有料老人ホームなど各棟の屋根に(編集委員・門田誠)

「経済活動」「温暖

(編集委員・門田誠)